

# 大出現したしし座流星群

渡 辺 誠

## しし座流星群大出現

2001年11月19日未明、しし座流星群が大出現し、一時間に2,000個程度の流星が流れる様子が見られました。これは流星雨と呼ばれる大変珍しい現象です。

この日は午前0時前頃から地平線と平行にゆっくり流れる、継続時間の長い流星が数多く見られました。さらにその後も流星は増え続け、午前3時過ぎに最も多くの流星を見ることができました。富山市内では午前1時半頃まで晴れておりましたが、その時間まででも数多くの明るい流星を見ることができました。その後、県内の多くの場所では曇ってしまいましたが、雲間ごしからも明るい流星が数多く見えました。日本で流星雨が見られたのは江戸時代終わり以来で、約139年ぶりの現象になります。

## 流星とは何か

夜空を流れる流星は、遠くの天体の現象ではなく、上空約100kmの現象です。流星は直径1cmほどのチリが地球に飛び込み、空気とぶつかり、発光する現象です。そのチリを運んでくるものは彗星です。

流星は毎年たくさん見える時期があり、それを  
図2 彗星のまきちらしたチリが流星となる



図1 しし座流星群の流星（立山室堂にて中川達夫氏撮影）

流星群と呼んでいます。彗星から噴出されたチリが彗星の軌道上を広がって、太陽の周りを回っています。まるで、川の流れのようなものです。その川の流れに地球が通りかかると、チリが地球に飛び込み、それが空気と衝突して光を放ちます。それが流星です。チリの川の流れは広くはないので、流星群はそんなに長期間は見ることはできません。

今回大出現したしし座流星群は1998年に太陽に接近したテンペル・タットル彗星を起源とする流星群で、彗星が33年に一度接近するので、33年に一度流星雨が見られるかもしれないと期待されていました。実際、1833年、1866年、1965年は流星雨が見られました。今回は1998年が予想されましたが、その時は1時間に50個程度の流星が見られただけで、流星雨とは言えませんでした。しかし、1999年には東ヨーロッパで流星雨が見られ、今年は東アジアで見られることが予報されていました。

流星群の場合は一点を中心に放射状に流星が流れるのが特徴です。その中心（輻射点といいます）がしし座にあれば、しし座流星群と呼ばれます。表紙の写真ではある一点を中心に、放射状に流星が流れていることがよくわかります。

